

中原中也君の印象

萩原朔太郎

青空文庫

中原君の詩はよく讀んだが、個人としては極めて浅い知合だった。前後を通じて僅か三回しか逢つて居ない。それも公會の席のことで、打ちとけて話したことはなかつた。ただ最後に「四季」の會で逢つた時だけは、いくらか落付いて話をした。その時中原君は、強度の神経衰弱で弱つてゐることを告白し、不斷に強迫觀念で苦しんでゐることを訴へた。話を聞くと僕も同じやうな病症なので、大に同情して慰め合つたが、それが中原君の印象に残つたらしく、最近白水社から出した僕の本の批評に、僕の人物を評して「文學的苦勞人」と書いてゐる。その意味は、理解が廣くて對手の氣持ちがよく解る人（苦勞人）といふのである。僕のちよつとした言葉が、そんなに印象に残つたことを考へると、中原君の生活はよほど孤獨のものであつたらしい。大體の文學者といふものは、殆んど皆一種の精神病者であり、その爲に絶えず悩んでゐるやうなものであるが、特に中原君の如き變質傾向の強い人で、同じ仲間の友人がなく、その苦痛を語り合ふ對手が居なかつたとしたら、生活は耐へがたいものだつたにちがひない。前の同じ文中で、中原君は僕のことを淫酒家と言つてゐるが、この言はむしろ中原君自身の方に適合する。つまり彼のインザムが、彼をドリンケンに惑溺させ、酔つて他人に食ひついたり、不平のクダを卷かさせたのだ。この酒

癖の悪さには、大分友人たちも参つたらしいが、彼をさうした孤獨の境遇においたことに、周囲の責任がないでもない。つまり中原君の場合は、強迫觀念や被害妄想の苦痛を忘れようとして酒を飲み、却つて一層病症を悪くしたのだ。所でこの種の病氣とは、互にその同じ仲間同士で、苦惱を語り合ふことによつて慰せられるのだ。酒なんか飲んだところで仕方がないのだ。

中原の最近出したラムボオ譯詩集はよい出来だつた。ラムボオと中原君とは、その純情で虚無的な點や、我がままで人と交際できない點や、アナアキイで不良少年じみてる點や、特に變質者のな點で相似してゐる。ただちがふところは、ラムボオが透徹した知性人であつたに反し、中原君がむしろ殉情的な情緒人であつたといふ一事である。このセンチメントの純潔さが、彼の詩に於ける、最も尊いエスプリだつた。

青空文庫情報

底本：「萩原朔太郎全集 第九卷」筑摩書房

1976（昭和51）年5月25日初版発行

底本の親本：「文學界 第四卷第十二號」

1937（昭和12）年12月号

初出：「文學界 第四卷第十二號」

1937（昭和12）年12月号

入力：きりんの手紙

校正：ニオブ

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中原中也君の印象

萩原朔太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>